

(ほう)こん

題字・清水英夫

GALAC・10月号・付録
2022年10月6日発行(毎月1回6日発行)
昭和43年3月8日第三種郵便物許可
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-10-14 中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会
TEL (03) 5379-5521 / FAX (03) 5379-5510
ホームページ <https://www.houkon.jp/>
Eメール kondankai@houkon.jp
編集・川喜田尚

特別号

ありがとう！ 嶋田親一さん

嶋田親一さんが、2022年7月9日、うつ血性心不全により東京都内の病院で逝去されました。90歳でした。

嶋田さんは、放送批評懇談会に1980年に入会し、長く理事として活躍。90年からは常務理事、96年〜2001年には専務理事もお務めになりました。1981年からは『放送批評』に編集委員として参加され、83年に編集長、84年から90年までは出版編集委員長や編集長代行、編集委員として雑誌を支えられました。企画事業委員長、総務・総合企画室担当、30周年担当、40周年担当など数多くの要職を歴任して会の発展に貢献されました。その功績に心から感謝し、謹んで哀悼の意を表します。



①2007年撮影、②90年代専務理事時代、③80年代初頭『放送批評』編集長の頃、④第44回ギャラクシー賞贈賞式にて。左から松尾羊一さん、鈴木典之さん、嶋田親一さん、石井清司さん、志賀信夫さん(2007年5月31日)

嶋田親一 しまだ・しんいち

1931年生まれ。秋田県出身。50年劇団新国劇芸芸部入団。54年ニッポン放送開局に参加、ラジオプロデューサー。59年フジテレビ開局で異動、テレビディレクター、プロデューサー。67年同編成部副部長。69年出向で(株)新国劇社長。フジテレビ制作分離により71年には新制作(株)社長。76年に本社復帰して調査役。78年フジテレビと三越の合併による(株)スタジオアルタに出向し同社常務取締役(80年オープン)。82年フジテレビ退社。独立してフリーの演出家、プロデューサーに。そのほか、日本演劇協会常務理事、放送批評懇談会理事・専務理事、日露演劇会議理事などを務める。主な制作作品に、テレビ『にあんちゃん』『三太物語』『北野踊り』『小さき闘い』『わかれ道』『6羽のかもめ』『20の赤いバラ』『さよなら鎌倉文士の館』、舞台『娑婆に脱帽』『江戸っ子気質』『浅草八犬伝』『臉の母』『紅蓮』、映画『暁の挑戦』『ブルークリスマス』『廃市』などがある。

追悼 嶋田親一さん

嶋田さんから受け取った信念のバトン

入江たのし

放送批評懇談会の会員になったばかりの頃、年々進化するギャラクシー賞の贈賞式に出席し、そこで総合演出を担当された嶋田さんの存在を知ることになった。

放懇の30周年を経て、ちょうど専務理事として40周年に向けて尽力されていた時期。ボクが入会する前の個性派の会員が集う会をまとめ上げられてこられたお話などを伺い、在籍したニッポン放送の大先輩でもあることから、何かと声をかけていただくようになり、ギャラクシー賞贈賞式の演出補佐という形で、年に一度の事業のお手伝いをさせていただくようになった。

ホテル大宴会場での開催が当たり前の今と違って、1990年代半ばまでは、司会も放懇の会員が中心の「いかにも手作り」な催しで、顕彰される部門も今より少なく、豪華ゲストがクローズアップされたり、ニュースとしてショーアップされるような内容ではなかった。

あくまで制作者が表彰される松舞台、という理念がありながらも、ここぞという時には「大物」をさらりとブッキングする人脈は、長年のフジテレビ制作畑におけるキャリアならではのもの。何が何でも話題になればよい、という昨今の世の中の風潮とは一線を画していて、メリハリの効いた演出を教わった。

ギャラクシー賞贈賞式の規模拡大や話題性もさることながら、放送批評懇談会自体の発展にも「隔世の感がある」と常々おっしゃりながらも、制作者こそが主役なのだという信念を貫いておられた。この信念のバトンは引き継いでいこうと思う。

侃々諤々は放懇の良き伝統

鈴木嘉一

嶋田親一さんと親しくなったのは2012年、私が放送批評懇談会の理事になってからだ。毎月、新宿の事務局で開かれる理事会の後はいてい、選奨事業委員長だった藤久ミネさん、専務理事の橋本隆さんらとともに、近くの中華料理店に流れた。理事会の議論の延長戦だけではなく、放送界全般について談論風発し、大いに刺激を受けた。

嶋田さんは「侃々諤々は放懇の良き伝統」と何度も強調した。放送批評懇談会編の『放送批評の50年』は、嶋田さんが編集委員や編集長を担った1980年代を「論争の時代」と位置付けた。ある時、先鋭的なジャズ評論家平岡正明の「憂国TV論」、これに反論したTBSの大山勝美の「女・子どもでなぜ悪い」、平岡の反論「男が男でなぜ悪い」について尋ねると、相手を崩して回想した。活動範囲や人脈は広く、日本演劇協会の常務理事も務めていた。私は『演劇年鑑』で2013年

から毎年、テレビドラマの回顧を書くよう頼まれた。「NHK大河ドラマのヒロイン像」と題し、生け花団体の総会で講演するよう依頼されたこともある。

秋田への郷土愛は強く、元新国劇社長として時代劇をこよなく愛した。懐が深く、いつもユーモアを忘れず、一緒にいて楽しい人だった。合掌。

敬愛する先達 嶋田親一さん

田代勝彦

この夏の猛暑のなかで、嶋田親一さんの訃報に接し、やり切れなさが増す。

私が「放懇」に入会した二十年前、嶋田さんは専務理事で、推薦人になってくれた。そして二年後、「専務理事の後任になってほしい、志賀理事長も了承している」と言われた。新宿の常連の居酒屋「千草」でのこと。「いや、待つてください。私はサラリーマン出身でまだ右も左も分からない」と固辞したが、「新鮮な目で見直してほしい、サポートする」となり志賀理事長時代が終わるまで専務理事を務めさせてもらった。

嶋田さんが最も愛したのは「演劇」だった。前進座の年一回の国立劇場公演に同伴させてもらっていたが、四く五年前から「歩くのが難しい」と行けなくなり、私が観劇報告の電話をする、いつも声はともお元気だった。

そして、今年五月半ば、「杜若艶色紫」を観て何かダイヤルしたが応答はなかった。

放懇の宴席の恒例は、嶋田さんの「新国劇」流の締めだった。あの「イヨッ!」というドスのきいた掛け声、もう一度聞きたい。

嶋田親一さん、2020年新年会の三本締め

2020年1月30日に新宿5丁目の料理店「飲」で開催された放送批評懇談会理事会新年会。締めを飾ったのは嶋田親一さんでした。コロナ禍に襲われる直前、絶妙のタイミングで、あの名調子の三本締めを放懇にいただくことができたことは、今思えば感無量です。ここに全文をご紹介します。

三本締めでございます。能書きがちよっとあります。いろんなことがございます。いろんなことがございましたが、皆さんのお顔を見てこれからの1年、11カ月、オリンピックもあります、いろんなこともあります。

私も信井会長（信井文夫映像新聞会長）と同じように八十八になりました。8月にはもう一つ歳を取ります。それでまだ仕事をやれるということは、放懇で育てていただいたおかげであります。

手締めは古い形でございますが、初めての方もいるのでお笑いになると思いますが、口上からはじめまして、三本締めでございます。

目出度きは松竹梅福祿寿。
月照り雪舞い花咲き匂う雪月花。
放懇、もう何十周年になりましたか。そしてまた今年は令和2年。何が起こるかかわらないけれども、とにかく健康で明るく、ことし1年



の残りをやっていただくことを祈念いたします、もう一回申しあげます。

目出度きは放送批評懇談会。

長く仲良く、和で続けるようにお願いすると同時に、放送批評懇談会のみならず、テレビの世界、ラジオの世界、その他がこの日本の中でどうやって令和を生き残っていくのか。皆さんのお力でやることを祈念いたします。

そしてまた放送批評懇談会のこれからの発展と皆様のご健康、そしていろんなことがございますが、仲良く話し合いながら進めることを祈念いたします、お手をいただきます。

いただきますお手は三本。
いよーお！（三本締め） もう一つ！（三本締め） もう一丁！（三本締め）
ことし、頑張りますよ！

人と会う幸せに溢れた笑顔

中島好登

嶋田親一さんが志賀信夫さんと出会ったのは、1960年代のこと。歌舞伎町のバー「梅林」だと聞いています。いつもカウンターの奥に陣取り、ママにテレビをつけてもらって批評を書いていた志賀さん。それを見て「バーは酒を飲むところだ！」と嶋田さんが囁み付いたのが、お二人の馴れ初めとか。しかしお二人はあつという間に意気投合して、作り手と批評家として切磋琢磨していくことになったそうです。

時は経て、テレビ局を飛び出した嶋田さんは放送批評懇談会に入会され、志賀さんを支える存在となっていく。80年代は『GALLA』の前身である『放送批評』を指揮され、作り手と批評を橋渡しする誌面作りに尽くされます。当時、新米事務局員で右も左もわからなかった私は嶋田さんからたくさんのお教えをいただきました。その明るく温かなお人柄にどんなに助けをいただいたことでしょう。当時、会ではいつもどこかで熱い議論が繰り広げられ、一触即発となることも。そんな時、必ず一喝で収めてくれるのが嶋田さんでした。嶋田さんがいるから、みんな安心して議論風発を楽しんでいたのだと思います。

嶋田さんのご著書に『人と会우는幸せ！』があります。嶋田さんからは、人と会い、語らう幸せが溢れていました。どんな方と会う時も楽しそう、言葉は弾み、目をきらきらと輝かしていらっしやいました。演劇界でも放送界でも、どこに行っても人と人を結びつける名人、達人でした。

コロナ禍が始まる前の8月、嶋田さんの米寿のお誕生会にお伺いしました。多くの人に囲まれた

嶋田さんの満面の笑みを忘れません。

嶋田さん、私も嶋田さんと会えて幸せでした。

忘れられない名文句

永田俊和

「めでたきは松竹梅、福祿寿、雪月花……」——嶋田さんと言えば誰もが思い浮かべるに違いないあのフレーズ、イベントを締めくくる「三本締め」の名文句を、もう聞くことが出来ないなんて、残念でなりません。

私にとって嶋田さんは放懇ばかりでなく、ニッポン放送の、いや何より人生の大先輩と言わなければならない。特に「ギャラクシー賞贈賞式」始めさまざまな場面で、あたたかなご指導をいただきました。

ここ3年余りはコロナ禍もあり、ほとんどお話しさせていたく機会ありませんでしたが、テレビドラマのこと、お芝居のこと、伺いたかったことは尽きません。

今頃は志賀信夫さん、伊豫田康弘さんはじめ、そちらにいらっしゃる放懇の諸先輩と楽しく語らっておられることでしょう。私も遠からず、お仲間に加えさせていただきますが、どうぞその折に

3ページの記事にある嶋田親一さんの2020年の「三本締め」の動画を正会員限定で公開します。ご覧になりたい方は以下のQRコードからおすみください。



追悼文は、前号「ほうこん」告知に応じて、お寄せいただきました。掲載は、五十音順としました。

は、あのあたたかな笑顔で迎えてください。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

威風堂々たる専務理事

藤田真文

嶋田親一さんご本人を目の前にしたのは、私が最初に放懇総会が理事会に参加したころであったかと記憶する。肅々と会の進行を捌き、また放懇がおかしな方向に曲がりそうな時には一喝、実に威風堂々とした専務理事だった。洒落な物言いからてつきり江戸っ子と思ったら、何と私（青森）の隣、秋田県のご出身だった。会うと郷里の話も交え、若手だった私の背中をいつも優しく押してくださった。

それから嶋田さんとは、別の出会い方もしている。放懇の50周年記念事業『放送批評の50年』を編集するため、嶋田さん出版編集委員長時代の『放送批評』誌を読んだ。編集方針は非常に自由闊達。例えば、放送界以外にもパネラーを招いた座談会に学生も参加させ、その発言を再録するなど、一言でいえば「外に開かれた雑誌」だった。プロデューサーとしての嶋田さんの力のなせる技だったのではないだろうか。その開かれた自由な精神は、現在のGメンバー制度に引き継がれたと思っている。

嶋田親一さんへの感謝の思い

三原治

出合いのきっかけは放懇の酒席でした。当時、日本放送作家協会の理事だった名刺を差し出した

ことから、歴代会長の内村直哉氏や阿木翁助氏の話を次々と聞かせてくれました。日本大学芸術学部演劇学科のOB会に「演劇江古田会」というのがあり、その重鎮に嶋田さんのフジテレビ時代の部下がいたりと思議な交友関係が広がっていました。いつしか、嶋田さんが事務所代わりになっていた新宿「千草」にたびたび訪ねるようになっていました。

日本放送作家協会の50周年の統括プロデューサーを任されたとき、嶋田さんの口利きで、森本薫の『女の一生』を戌井市郎氏演出、文学座の大道具さんに、布引けい役は淡島千景さんで朗読劇として公演してくれました。日本脚本アカイブズの関連で、嶋田さんにオーラルヒストリーをお願いしたこともありました。放送批評懇談会創立50周年記念式典では、嶋田プロデューサーから進行台本を命じられたのも良い思い出です。

ここ数年は、私の運転でお送りをお送りするのが恒例となっていました。江古田に移られてからは、練馬住まいの私と近所になったと仰っていたきました。何度かお送りした江古田のマンションの近所にスーパー「みらべる」があります。コロナ禍になってから、もしかしたら嶋田さんに偶然会えるんじゃないかと、練馬から散歩がてら覗きに行っていました。その願いはかないませんでした。

名調子の三本締めが懐かしいです。口上のひとつに、漢数字の「九」にひとつ点（・）を加えることで「丸」になり、ものごとがすべて丸く収まるというのもありました。嶋田さんには沢山のことを教えていただきました。感謝しかありません。心より、お礼を申し上げます。